

ラディカル・エコロジー 第9章 「持続可能な開発」プレレジュメ

2009/06/07

千葉・並木・関口・瀬川

【はじめに】

今回私たちはラディカル・エコロジー最終章である、【持続可能な開発】、および【結び】を扱います。持続可能な開発の要約を載せるので、文献を理解するのに役立ててください。また、結びは今までの総まとめなので、あえて要約はしません。各自、今まで学んできた理論を整理するために読んでください。

発表、議論では文献の中にある『生態地域主義』を中心に扱い、どのようにすればそれを社会に適応させることが出来るかを話していきたいと思います。そこで私たちは『生態地域主義』を推し進める上で、エコロジカルな発想の転換を目指します。エコロジカルな危機の根本原因は、現在の世界を支配している資本主義的イデオロギーにあると考えます。真のエコロジカルな世界を作るには、今までの社会システムを見直し、新たな構造へとパラダイムシフトしなくてはなりません。発表では、生態地域主義を基盤にした新しい社会システムを提案したいと思います。議論では、その提案に対して皆さんの意見を聞きたいと思います。

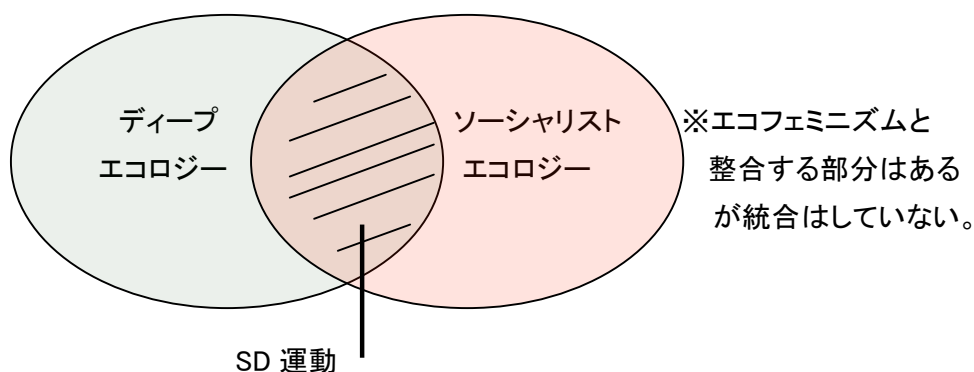
今回でラディカル・エコロジーは最後です。言い残しのないよう、不完全燃焼のないよう、今までの知識を総動員し、みんなで活発な議論にしましょう。

【持続可能な開発 (SD=Sustainable Development)とは何か】

①環境的に健康な生産(エコロジカル)に転換

→生産とエコロジーの矛盾を解決する

②主流は人間中心的で功利主義的



■持続可能な農業・・・ ①SDのための大きなプログラムの一部

⇕
産業化された農業

②生態学に基礎をおく農業経営の一形態

再生可能な資源的基盤を保全し、外部からのテクノロジーの投入を減らす。＝化学物質を大量に使用するやり方から、エコシステムを尊重した農法へ。

- 原理:① 長期的農業生産高の最適化
② 多様化された農業生態系の促進と維持
③ 有機物を利用し土壌の肥沃度を高める
④ 輪作、被覆作物、緑肥を広範に用いる
⑤ 輸入肥料や農薬の利用の制限

ドン・ホセ・メンドーサ・・・<農民が農民に教える>運動の重要な担い手
コースを開き知識と実地を共有出来るよう図る

■永続的耕作・・・デイヴィッド・ホームグレン、ビル・モリソンが構想。

- ①特徴: 多年生の植物と家畜の相互作用を通じて極相状態へと向かうエコシステムの進化を模倣。
②メリット: ・全体的収穫の増加が期待出来る
・生産される食物の多様性を増大させる
・広範な人間の住む場所に適用することが可能

■生物を利用する病虫害のコントロール

・・・持続可能な営農に関する例の1つであり、生態学の指針を用い、害虫の天敵をエコシステムに導入し、害虫の個体数のレベルをコントロールする。

⇔ 化学的コントロール ex. 農薬などの利用

人間は生態学的複合体の一部であり、昆虫と人間は共存しなければならない。

【復元の生態学】

復元 ⇕ …自然のパターンを研究し真似ることにより、人間によって攪乱されたエコシステムを回復し原始のエコシステムを再構築すること。
機械論的モデル・・・常に外からの介入により修理が行われる。

自然のエコシステムが再び成り立つように人間が手を加える。

さらに、公園などの自然区域だけにとどまらず、森林や都市の中に自然と人間社会との境界域を創り出す。

【生態地域主義】

生態地域主義…初期生態学のバイオームシステムの分類概念から生まれた、「人々は一定の地域に住み、生活し、地域の世話係である」という考え方である。

生態地域主義→新しい地域政治学を提唱

〈綱領〉一定の生態地域の資源の範囲内で生活を行うこと

そこに住む人々にとって、その地域の地理的な特徴だけでなく、人間と人間の意識とともに、生命の相互に依存しあった全ての形態と過程が重要である。

■生態地域主義に対する批判

地域に焦点を合わせることで、地球全体に及ぶコンテキストに目を向けることが難しくなり、現実世界における様々な連関を単純化する。また、土地固有のものを強調し、外来のものとの意義を抹殺することにつながる。

→例 一つの都市の廃棄物である排煙などを別の都市の疾病に結びつける大気システムや他の地域から輸入された植物などを無視してしまう

【先住民族と持続可能性】

「持続可能な生活様式に向かう」変革のプログラムとしての先住民族の取り組みとは？

例1：マオリ

土地利用の持続可能な形態へ

- ・人間が土地に負う保護責任
- ・「人は滅びるが、土地は存在し続ける」

といったマオリの土地倫理や精神的価値が普遍的問題の取り組みに必要である。

例2：ペナンの採集・狩猟者

生活様式の維持

1980年代 ペナンの土地で徹底的な伐採が始まる

→ペナンの人々の伝統的な生活様式の破壊

1987年 森林を守るためのバリケード活動開始

→数か月にわたって丸太搬出を阻止

しかし…彼らの生活は変わってしまった

・先住民、産業、政府、環境主義者の間の協力・話し合いで今後の開発の在り方を改善

例3:アマゾンの森林に暮らす人々

自然破壊を伴わない開発

1976年 多雨林の伐採者に対して、ゴム液採取者たちのスタンド・オフ運動開始

→運動の限界、法的地位を得る運動へ

・熱帯林をゴム樹液採取保護区とし、破壊を伴わずに開発を行うことを要求

例4:ハワイの先住民

地熱開発からの保存

火山の地熱を生かした発電

→火山の女神への冒とく、バランスの上に成り立つ生態系の破壊を主張

・レインフォレスト・アクション・ネットワークの提案による代替法

これら先住民たちの知恵を

・持続可能な経済開発

・国際的な開発計画に

組み込むことはできるのだろうか？

【ブルントラント・レポートについて】

ブルントラント・レポート

→資源ベースを維持し続けるような新しい形の経済開発を要求

※実現のためには、人口と経済成長が、自然本来の持つ力に調和しなければならない。

■何故、第三世界は「持続可能な経済成長」が実現できていないのか？

①貿易の利益を、負債の支払いにあてなければならないから

②国際的なプロジェクトにより、環境破壊が進んでいるから

■ブルントラント・レポートに対する批判

【批判】

①成長指向的な開発の産業モデルを強調している

②工業化された諸国と、多国籍企業の利益を重視している

③特定の種を救うか絶滅させるかの意識的な選択を提唱している

自分たちに関係のないことは顧みない傾向がある。

⇒つまり、人間中心的・成長指向である

■スラップの見解

●SD 運動は、2つの主要な陣営に分かれている

グループ①

野生と種の保存、技術的解決、人口抑制を強く指向。

その一方で、第三世界が直面している社会問題には関与しない。

グループ②

土地・健康・教育など、生活の質における社会正義の実現を強調している。

●主流の SD 運動は、形式的で、問題の本質を捉えていない(=人間中心的)

→スラップは、進歩主義的な戦略と、制度の多様性を主張。

そして、資金と資源を供給することにより、直ちに実行されるべきと結論づけている。

以上